

センテンスレベルからパラグラフレベルのライティングへの橋渡し～教科書本文の効果的な活用方法～

工藤 洋路

1. はじめに

2013年度から学年進行で実施される高等学校の新学習指導要領に関しては、これまで、「『授業は英語で行うことを基本とする』こと」や「オーラル・コミュニケーションという科目がなくなること」、そして「指導する標準的な単語数が1,300語から1,800語に増加(中学校・高等学校合わせて2,200語から3,000語に増加)すること」などが改訂のポイントとして注目を浴びてきたように思われる。これらのポイントよりはやや注目度は低いかもしれないが、本稿では「ライティング」という科目が新学習指導要領からなくなったことにフォーカスし、今後求められるべきライティング指導についての一つの提案を試みることにする。

今年度実施された中学校の新学習指導要領と同様に、高等学校においても4技能の総合的・統合的な指導が強調されている。上述したとおり、「ライティング」という科目がなくなったが、ライティング活動が減るというわけではなく、主要科目である「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の中で他の技能との連関の中で書くことを多く取り入れることが可能である。また、発表技能を統合的に指導することが求められる「英語表現Ⅰ・Ⅱ」では、話す活動とともに多様な書く活動を行うことが期待される。では、この新しい学習指導要領の中の新しい英語科目の下でどのようなライティング指導を実践していけばよいのであろうか。

2. ライティング指導の現状と課題

効果的なライティング指導を考える前に、高校生の英語ライティング能力の現状を捉えてみる。現行の学習指導要領の実施が開始された数年後に行われた「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査^(注)」の結果を概観してみると、書くことについての課題が存在することがわかる。与えられた身近なトピックについて自由に書く問題(具体的には、英文の書

き出しは示してあり、4文以上書くことが指示された問題)において、2種類の問題で、無解答率がそれぞれ28.5%と22.8%、そして、3文以下しか書けなかった生徒がそれぞれ17.0%と17.6%であった。つまり、40%以上の高校生が、身近なトピックであっても、一定量の英文が書けなかったということである。さらに、4文以上書くことができた生徒のうち、下記の条件を満たした解答は、それぞれ21.7%と25.0%であった。

- (ア) 明確な理由が述べられている。
- (イ) 単なる文の羅列に終始することなく、順序よく書かれている。
- (ウ) 内容理解に支障をきたすような、語順・時制等の誤りがない。

このように、与えられたトピックについてほとんど英文を書くことができなかつたり、「意見→理由」といったような内容的なつながりが見られない羅列的な英文を書いてしまうという課題の原因は、金谷(1999)の以下の指摘に見ることができる。

「進んだ人(?)」は paragraph writing に奔り、「遅れた人(?)」は和文英訳に恋々とする。そして、「進んだ人」はまだまだ絶対少数派である(中略)。しかし、たとえ paragraph writing 派が進んでいるとしても、それだけやっていたら偉い(?)というものではない(中略)。困るのは和文英訳と paragraph writing の間に何も無い状況にあることなのである。

この指摘がなされてから10年以上経過しているが、この構図が大きく変わったとはあまり思えない。paragraph writing 派は増えたとは思われるが、書くことの指導の実態や教科書の書く活動を見ても、和文英訳からすぐに paragraph writing に進むケースは少なくないと思われる。つまり、和文英訳というセンテンスレベルと、50語以上など一定量を

求めるパラグラフレベルとの間に位置するライティング指導が少ないことが現状の課題と言える。

3. これからのライティング指導への一提案

センテンスレベルとパラグラフレベルの間を埋める指導や学習はどのようなものであろうか。その1つ目の条件としては、3文程度ではあるが、羅列的ではなく、内容のつながりがある小さなディスコースを書くことが考えられる。いきなり数十語からなるパラグラフを求められても書けない生徒にとっても、3文程度であれば、その活動に抵抗なく取り組めることが期待できる。2つ目の条件としては、3文でもなかなか書けない生徒を想定して、何らかのモデルを提供することである。何を書いてよいかわからない生徒は、言いたいことを英語でどう書き表すか(how)という段階以前に、何を書けばよいか(what)の部分で悩んでいることが多い。あるいは、howとwhatの段階を同時に処理しようとして混乱してしまい、手を動かすことができずにいるケースも考えられる。そこで、内容的に参考になるモデルを示すことでwhatの部分のヒントを与えることができ、また、使うべき文法や表現をモデルの中で示すことで、howの部分のヒントを提供できる。この2つの条件を満たすモデル(ここでは、3文程度で内容的なつながりのある英文を想定しているので「ミニディスコース」と呼ぶ)を継続的に教師が生徒に示していくことが大切になる。

では、モデルとなるミニディスコースをどのように探していけばよいであろうか。現行の「ライティング」の教科書には、書くためのモデルが多く掲載されているので、3文程度の適切なミニディスコースを見つけるのは比較的やすい。例えば、*POLESTAR Writing Course*(数研出版)には、下記のようなモデルが掲載されている。

I'm very interested in trains. If I could travel through time, I would visit Tokyo Station in 1964. That's because I want to see and get on the very first Shinkansen train that left the station on October 1st that year. (p.39)

この3文からなる英文では、「興味のあること→やってみたいこと→その理由」という内容的な流れ

が容易に見てとれるため、書くべきモデルとしてのミニディスコースの条件を備えている。言い換えると、それぞれの文に上記のようなラベルが付けられれば、生徒は文ごとに何を書いてよいか(what)がわかると言える。また、文ごとに使われている言語材料(ここでは、interested→仮定法→that's because)を引き出すことで、考えた内容をどのように英語にすればよいか(how)も把握することができる。

上記のミニディスコースは現行の「ライティング」の教科書から取り出したものだが、新学習指導要領ではこの科目は消えてしまう。そこで、主要科目である「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」では、現行の「英語Ⅰ・Ⅱ」と同様に、読解のための本文が掲載されることを想定して、その本文から、ライティングのモデルとしてのミニディスコースを抽出する方法を考えてみることにする。もちろん、上記のようなミニディスコースは新課程の「英語表現Ⅰ・Ⅱ」でも多く見られることが期待できるが、「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」は単位数も多いため、継続的に書く活動を行うには適していると考えられる。また、読むための本文を単にインプットの素材で終わらせるだけではなく、部分的にでもアウトプットのための材料として利用すれば、新学習指導要領で強調されている技能を統合した指導を実践することも可能となる。

4. 本文からミニディスコースを抽出する方法

現行の「英語Ⅰ・Ⅱ」あるいは来年度以降の「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」における教科書の本文では、1つのパラグラフをそのままライティングのモデルにすることは、ほとんどの場合不可能である。そこで、上記の例のようなミニディスコースを抜き出すために、教師は、読解指導の際とは異なる視点で再度本文を読み解く必要がある。ここで、現行の「英語Ⅰ・Ⅱ」の教科書から、ミニディスコースの抽出例をいくつか挙げてみる。

(1) 時を表す表現に注目

POLESTAR English Course II(数研出版)から次の3文を抽出した。ここでは、時を表す表現に注目して、「技術の進歩により20世紀末から21世紀にかけて変化したこと」について、教科書以外の例を自分で考えて書く活動を設定する。このミニディス

コースからは、内容の流れとして、「～が進歩して、20世紀末に人々が～し始め、ここ10年ではより多くの～が～」というものを引き出し、また、言語材料は下記の網がけの部分にフォーカスをさせる。生徒が書く例として、携帯電話とメールを取り上げた。

<教科書からの抽出 (p.112)>

With today's advances in biotechnology, the 21st century may be called the bio-century. Late in the last century, scientists started to develop GM foods using genetic engineering. For the past ten years, more and more land has been used to produce these new foods.

<生徒の作文例>

With today's advances in telephones and emails, the 21st century may be called indirect communication. Late in the last century, many people started to use cell phones and send emails. For the past ten years, more and more people have come to have their own cell phones and have had fewer chances to talk face-to-face.

(2) 現在と過去の対比に注目

BIG DIPPER English Course I (数研出版)では、現在と過去の対比が見られるディスコースがある。本文は水問題を扱っていることから、「社会問題をテーマにして、現在と過去を対比させながら、最後に比率を用いてまとめる」という流れが想定できる。生徒の例として「高齢化社会」を取り上げた。

<教科書からの抽出 (p.64)>

A century ago, there were only about two billion people in the world. Now there are more than six billion, and people consume six times as much water as they did then. Today, one person in five does not have clean drinking water.

<生徒の作文例>

Thirty years ago, less than 10% of the Japanese population were over 65 years old. Now nearly 25% of the population are over that age. Today, one person in four is over 65 years old.

(3) 説明文の中の「理由と結果」に注目

BIG DIPPER English Course II (数研出版)では、下記の2文が見られる。ある有名なものの説明(紹介)だが、「1文目にはイントロを書き、2文目は because of its ~を用いてその最大の特徴を理由として述べて、その結果を続けて書く」というミニディスコースである。観光スポットなどを紹介する活動のモデルなどとして使えるディスコースである。生徒の書く例としてスカイツリーを取り上げた。

<教科書からの抽出 (p.126)>

The Silk Road was the great east-west highway which linked the continents of Asia, Europe, and Africa. Because of its great length and age, it influenced dozens of civilizations along its way.

<生徒の作文例>

Tokyo Skytree is the tallest tower in the world which attracts many tourists from all over Japan. Because of its height, it was visited by 1 million people for the first ten weeks after its opening day.

5. まとめ

上記の例のとおり、教科書本文から抽出したミニディスコースのかなりの部分をそのまま使って新しい内容で書くことができる場合もあれば、ヒントになる箇所が一部しかない場合もある。どこを抽出するかは教師の目のつけどころ次第であるが、教科書本文の中の内容的にまとまった3文程度の英文を効果的に使って、継続的にライティングを学習することは、センテンスレベルからパラグラフレベルのライティングへの橋渡しになると期待できる。

《注》

外国語は「英語 I」において、2種類の調査票(問題冊子)を、それぞれ約15,000人が受験した。

参考文献

金谷憲(1999)「和文英訳と paragraph writing の狭間」*The Forum for English Language Teaching*, vol.15, pp.7-10

(東京外国語大学 専任講師)